

志水辰夫

花
な
ら
ア
ザ
ミ



講談社

花
な
ら
ア
ザ
ミ

志水辰夫

講談社

H73005

花ならアザミ

定価 一三〇〇円（本体二六二円）

著者 志水辰夫

一九九一年四月二十六日 第一刷発行

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一一二

電話 編集部 (〇三) 五三九五―三五〇五



販売部 (〇三) 五三九五―三六二二

製作部 (〇三) 五三九五―三六一五

印刷所 株式会社廣済堂

製本所 黒柳製本株式会社

© Tatsuo Shimizu 1991 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。

花ならアザミ

浅田正史は手鏡に顔を押しつけるようにして、懸命にメイクアップ用のパフを使っているところだった。頬の色を消してしまうのにさっきから苦勞していた。たったいま着いたばかりだったので、顔が上氣してまだ汗ばんでおり、パウダーのりがひどく悪いのだ。鬢の白い毛をいじらなくてすむのはまあありがたいとして、唇の色はもっと黒く、目尻にもくたびれた感じのしみを入れるべきだろう。実際の年齢は三十三歳だったから、もともと地味な顔とはいえ、五十すぎの男に扮装するというのはそうたやすいことではなかったのだった。

正史の後で顔の長い、長身の男が不機嫌そうに煙草をふかしていた。こちらは四十そこそこ。目鼻の均整は取れているものの表情は陰しく、唇を尖らせている。顎が心持ち前方に反っていた。額に垂れかかる前髪を邪陰に払うと、男は何度も腕時計をのぞき込んだ。窓の外へ頻繁に目を走らせている。正史の支度の遅れているのが氣にいらなかった。

窓の向こうに、この住宅地へ上がって来る坂道が見えていた。山裾から半円状にカーブして登ってくる専用の取りつけ道路である。この区間だけ車道と歩道が分かれ、歩道にはスズカケノキが植えられていた。もっとも住宅地はまだ完成半ばで、並木もいまのところ荒縄に

縛られたままで、死ぬか生きるかの瀬戸際をさ迷っている。開け放した窓から忍び入ってくる風に、かすかに金木犀の香が漂っていた。

時刻は午後一時。秋の日差しがおだやかに降り注いでいる。横浜市磯子区杉田町の高台にあるこの住宅地に、いまのところ人影はまったくなかった。

「急げよ。一時だ」コーラの空缶に吸殻を投げ込んで男が言った。

「終わりましたよ」

男の苛立ちに気がついていないみたいなのんびりした声で正史は答えた。九分通りできあがった顔にティッシュを当て、浮き上がってくるしつこい汗を押さえているところだった。

「あと着換えるだけですから、客が見えてからだって間に合いますよ」

「それは先方が歩いてくればの話だろう。タクシーで乗りつけて来たらどうするんだ」

「独身の女性が自腹でタクシーに乗って来ますかね」

正史の返事は男をむっとさせた。

「だいたい一時間も遅れて来るといのがまちがってるんだ。拘束三時間という約束だったはずだがな」

「ですからバスを乗りすごしたんです」

「あれほど杉田町だと念を押したじゃないか」

「同じ町名で、九丁目まであるなんて知らなかったんです。折り返しのバスに乗ったら、今度は道路が渋滞して一キロ進むのに三十分もかかってしまった」

ふたりが話しているところは、家具のまったくない、がらんとした二階の八畳間だった。正史の肩掛け鞆と衣装ケース、男の足元にある皮製ビジネスバッグ、それに灰皿代わりの空缶といったものの以外、なんにもない部屋だ。そういえばどこことなく、空き家のような、日向くさい臭いが感じられた。家そのものは建ってそれほど間がないのだが。

男がバッグの中から取り出したハترون紙の封筒を正史に差し出した。一目で今日のギャラだとわかった。

「どうも」正史は素早く礼を言つてポケットにねじ込んだ。「領収書を書きますか？」

「いらんよ」正史とはうまが合わないと思はれ、男はどこか嫌悪感を見せながら答えた。

正史は急いで顔の点検をはじめた。頬、眉、鼻、唇、順ぐりに動かしてぼろが出ないかどうかたしかめる。五十代前半と思われる、なにやらお湯で急速に戻した干し椎茸という感じの男が、鏡の中からうさん臭そうに見返していた。役柄がうさん臭い以上これは仕方がなかった。三時間で五万円もギャラがもらえるバイトなど、そうめったにあるものではないのだった。

男が鞆を開いた。そして紫色の風呂敷に包んだ四角いものを取り出した。かなり大きくて、重そうだった。包みを開くと、中から古びた洋書が二冊出てきた。相当時代がかった代物だ。黄ばみ、しみ、こすれ等がかなりあり、虫食いの跡も認められる。背文字の『THE HISTORY OF JAPAN』という文字がはっきり読み取れた。

「貴重な本だから扱いに気をつけてくれよな」

「へー、こんな本が百万円もするんですか？」

「二百万するよ」

正史は手を引つ込めて男に白眼を向けた。「物好きがいるもんだ」

「稀観本というんだ。この『日本誌』は、江戸時代の日本を、ヨーロッパへはじめて本格的に紹介した本として有名だよ。しかもこれはロンドンではじめて刊行されたときの初版本なんだ」

「まあ引き受けた以上やりますけどね」ギャラをもらった以上、もう遠慮することはないと思つて正史は口調を変えた。「しかし犯罪や、不正行為の片棒を担ぐような行為だったら、あとで黙っちゃいせんからね」

「ただの税金逃れだと言つてるじゃないか。たしかに褒められたことじゃないかもしれないが、こちらにもいろいろ事情があるんだ。こういう本は数そのものが少ないから、だれが持っているか、業者とか関係者の間にはだいたい知られているものなんだよ。こつそり処分するとなると案外苦勞する」

「税金をごまかすくらいのことでしたら、喜んで協力しますけどね。しかしそれにしては小細工がすぎるんじゃないやありませんか」

「だから便乗したんだよ。ぼくの友人で広告会社やつてるのがいてね。今日ここでCFの撮影をやるっていうから、もつめの幸いと思つて、終わった後を借りたのさ。いくらなんでも本を処分するのに、こんな大げさなことをするわけないだろう。おっ、来たよ」窓の外に目を向けて叫んだ。「あの女性がそうらしい」

バス停からの坂道を、脇目もふらず上がつて来る女性の姿が見えた。大柄で、えんじ色の

スーツを着ている。シヨルダーバッグが肩。右手でしっかりバッグの口金を押さえている。ほらね、だから言わないことじゃない、なにがタクシーだ、ああいう女はがちがちの締めまりやと相場が決まっている。少なくとも芝居見物に金を使ってくれるタイプじゃないなど、正史はなんとなくいまいまいしく思いながら借りてきた上着に手を通しはじめた。

「それじゃあ言った通りにやってくれよ」男が心配そうに言った。「セリフをまちがえないようにな」

「こう見えてもプロの役者ですよ」いささかむっとしながら正史は答えた。「注文通りにできなかったらギャラはお返しします」

2

青空が透き通って見える気持ちのいい午後だった。坂道を登りはじめてすぐ、切り通しの斜面に彼岸花とアキノタムラソウが咲いているのを見つけた。なんとなくうれしくなり、すこし得をしたような気分になった。子どものころ、秋になると川の堤や線路の土手が、彼岸花で一面真赤に染まったことを思い出した。そういえばこのところすっかり彼岸花を忘れていた。いつの間にこの素朴な草花が見られなくなってしまったのだろうか。単に東京で暮ら

しているから目にする機会がなかっただけなのか、花そのものが減っているのか、あるいは自分がもうそんなことに気づかないほど変わってしまったのか、突然強い疑問にとらわれて、直子は思わずたじろいだ。いまの生活を苦にしているもうひとりの自分がいるみたいないきがして、季節の花さえ素直に喜ばなくなっているのだった。

坂を上がりきると、色とりどりの屋根瓦が日差しを跳ね返しながら行く手に立ち並んでいた。かなりの規模を持つ民間団地らしい。ただし整地工事はとくに終わっているのに、家は全体の三分の一も埋まっておらず、団地としてはまだ初期の工事が行われていた。正面広場に現地案内所のプレハブ建物が見えていて、旗幟が何本かひるがえっている。工事中の槌音にリズムを合わせるみたいに小鳥が空を飛んでいた。

バッグからメモを取り出し、ふたつめの角を左へという自分の筆跡をたしかめた。新築家屋が立ち並ぶ閑静な通りへ入って行く。片側にそれぞれ十戸あまり。この春完成した地域なのか、庭木がひと夏をぶじすごしてすっかり自信をつけている。ペランダに布団。ガレージに車。人氣がなくて夏の昼下がりに静かだった。

休まず歩いて来たのですこし汗ばんでいた。直子はいくらか歩運びをゆるめ、ハンカチを取り出して額に押し当てた。目的の家はもう間近だったので、もう一度自分の服装に気を配った。

彼女は百六十七センチある体軀を隠すみたいに目立たない服装をしていた。靴はたいてい黒で、ネックレスやアクセサリーの類はめったにつけなかった。職業柄ということもあるが、意識的に目立たないよう注意しているのだった。年は二十八。顔の小ぶりな、首の長い

女性である。目が大きくて、顎はいくらかすばまり気味。鼻も口も全体に小ぶりで、それも顔の中央に集まっている感じがするのだが、いかにもきりつと引き締まっていて、男性には概ね好感を与える。ただし人によつては高慢と受け取られなくもなかった。動きにむだがなく、有能そうな反面、どこか身構えている感じを与えるからだ。たしかに彼女が背筋をぴんと立て、前を向いて大股に歩いて行く生真面目な姿は、男にとってそう都合のいい想像をたくましくさせるものではなかった。並の男ならなにか圧倒されるものを感じるのである。

庭じゅうを花ずくめにした家が一軒あった。金木犀の花が路上にこぼれ、鼻孔をくすぐる濃厚な香りが辺りへたちこめていた。花壇の芙蓉や木槿の花はそろそろお終いになりかけており、サルスベリの赤い花ももう残り少なくなっている。庭のどこかに餌場があったのか、直子の足音に驚いた雀の群れがぱつと飛び立っていった。

その三軒先が目的の家だった。天窓のある白ずくめの家である。屋根の中央が高く尖り、ガラスを張った壁面が前へ三角状に出っ張っている。二階の出窓は左右シンメトリー。家の角をわざわざ正面に持ってきたみたいなの、なんとも奇抜なつくりだった。眺望、採光は最高としても、あまり使い勝手のよさそうな感じはしない。どこか均衡感に欠けている印象を与えるのだ。

フラワーボックスを左右に従え、背の低い門柱が左手に立っていた。赤煉瓦を敷いた車寄せに白い車が入っており、敷石伝いの道が、その傍らを通って奥の玄関へ通じている。表札に閨根と名が出ていた。インターホンと郵便受けがその脇。門の前をふくめ、庭全体にたっぷり打ち水がしてあった。

衝立状の低い仕切塀越しに庭が見えていた。雑草が一本もないできたばかりの花壇があり、ホウセンカやマリーゴールドがどこかあざとく咲いていた。ダイアンサスが赤く群れ、カンナも赤と黄二色そろっている。さらにアスター。菊も鉢に入って五つ、ペランダに並んでいた。華やかすぎる気がしないでもない。すぎたるは及ばざるがごとしという言葉を思い出させる庭だった。

インターホンのボタンを押すと男の声がはいと答えた。

「黄山堂から参りました」

「やあ、どうも。お待ちしていました」

すぐに玄関のドアが開いた。出てきたのは五十すぎの、眼鏡をかけた、小肥り気味の男だった。背があまり高いほうではなくて、どうかすると直子より低いのではないかと思われる。顔の輪郭が丸く、眉は下がって、鼻もどちらかといえば大ぶり。目がぎよる目だったが、その割りに視線はやさしく、童顔というか、気取っている顔にしてはあどけない若さが残っていた。血色がいいのか悪いのか、なんとなくはつきりしない顔色だ。顔全体からなんとなくアンバランスなものが発散している。間もなくその理由に気づいた。歯が白すぎるのだ。虫歯一本なさそうな頑強な歯をしている。肘当てのついたコーデュロイの上着を着ていた。

すすめられるまま中に入った。きれいに掃き清められ、打ち水のまだ乾いていない玄関に、男ものの靴が一足置いてあった。下駄箱の上にベゴニアの鉢が飾ってある。白木の廊下が磨かれてびかびかに光っていた。

二十畳近くある一階の居間に通された。落ち着いた雰囲気、モデルルームを思わせる整然とした部屋だった。なにかも新しく、悪くいえば生活臭がない。天井にダウンライト、床がオーク材で壁紙が白。家具類はすべて淡い茶色で統一されていた。右手が食堂になっており、対面式のカウンターが奥に見えている。出ている調理器具類はけっして多くなく、冷蔵庫の扉がまがましい光を放っていた。壁にカンディンスキーの複製画が二点。出窓を利用した壁際の棚にゴルフ雑誌とエコノミストが転がっていたが、書棚はどこにも見えなかった。そして例の三角状に出っ張った変形の窓から、日光がまるでスポットライトでも当てたみたいに鋭く差し込んでいた。こうガラスずくめでは、夏の陽差しをどうやって防ぐか、さぞ難儀することだろう。床に並べてアンスリウム、カトレヤ、ようやく赤い色のつきはじめたポインセチアの鉢、やたら観葉植物が置いてある。ただしどの鉢にも水受けの皿が敷いてなかった。

「どうも遠いところをわざわざご苦労さまでした」

男がていねいに言い、直子に名刺を差し出した。直子も名刺を出した。むろん個人用のものではなく、黄山堂の名刺である。男は直子にソファをすすめ、自分は向かいに行ってデスクチェアへ腰を下ろした。テーブルを縦に挟んでの対面になる。距離がすこし遠すぎる気もしたが、初対面とあればこんなものかもしれない。直子も名刺を見ながら尋ねた。

「黄山堂さんのご親戚ですか？」男が直子の名刺を見ながら尋ねた。

「はい。といってもごく遠い縁ですけど」

本当はなんのつながりもないただの店員なのだが、黄山堂の中根夫婦の了解を得た上で、

親戚ということにでもらっている。未婚女性の古本屋見習いとなると、男たちの好奇心の餌食にされてしまうからだった。

「珍しいですね。女性が古本屋をやってらっしゃるのは」やはり言った。男の目に生氣のようなものが生まれ、表情がにわかにいきいきしてきた。

「父がやっておりましたので、わたくしとしてはごく自然な仕事なんです」

「なるほど。しかしあの気むずかしい親父さんが、あなたをべた褒めでしたからね。じつの娘みたいにかわいがってらっしゃることはすぐわかりましたよ。あなたにつまらない冗談でも言おうものなら、雷が落ちるんじゃないかな」迎合するみたいな口ぶりで言って直子の反応をうかがった。

「ありがたいと思っています」直子は素っ気なく答えた。

「しかしあの界限もずいぶん変わりましたねえ。通りは広くなったけど、マンションばかりになって、人通りはがたと減ってしまった。あんなに寂れていようとは思いませんでしたよ。やはり都電を取り払ったのがいけなかったんだな」

「よくは存じませんが、そのような話は聞いております」

「それに黄山堂さんも一代限りだそうで、ますます淋しい。息子さんがふたりいて、誰も店を継がなかったというんだから。あんな人だから負け惜しみしか言わないだろうけど、本心はやはり淋しいと思いますよ。ぼくなんかがもうすこしお役に立てたらいいんだけどねえ。だいぶ不義理をしているんです」

「ずっと関西にいらしたとか」

「ええ。家が神戸だったものですからね。関東で暮らすのは二十五年ぶりになるかな」

どこかうわの空に近く、言葉に感情がこもっていないかった。その目はさっきから直子を直視している。名刺にはさる大手企業系の、カードサービス会社の営業部長という肩書がついていた。名が関根俊一。会社の所在地は神田になっている。

男の上着に目をやり、直子はげんそうな顔をした。襟元に止めてあるバッジに気がついたのだが、それがどうも企業のイニシアルと合いそうになかったからだ。会社のバッジだとしたらMの字ではじまらなければならぬのに、男の上着についているバッジの英文字はKとなっている。しかもバッジは明らかに蛙の形をしていた。グリーンの色が象嵌されている。見たところ完全な青蛙である。

男が咳払いをした。顔がわずかに赤くなっていた。直子の視線に気づいたのだ。

「ちょっと女房が出かけてましてね」

やや狼狽した感じで席を立つと台所に行ってお茶を入れはじめた。ポットのお湯を使っている。お盆に湯呑みをふたつつけて運んで来た。「じつは出かけたというのは口実で、本当は無理に外出させたのです。というのも、これはあくまでわたし個人の金策でしてね。女房には知られたくない。その点はぜひあなたにもお含みおき願いたいんだが」

近くへ来たとき蛙のバッジがよりはっきり見えた。男はわざと知らん顔をしていた。湯呑みをテーブルに置くとき、好色そうな目で直子の襟元を盗み見た。ソファが低いので直子の膝小僧はむき出しになっている。

「じつはおじが一昨日入院してしまったものですから」直子は固く膝を合わせて言った。

「えっ、中根さん、入院なさったの？」

「はい。前から肝臓が悪くて、お医者さんには通っていたんです。ところがとうとう黄疸を併発してしましまして、ドクターストップがかかり、急遽入院いたしました。お約束でしたから、今日は一応わたくしがおうかがいしましたけれど、詳しいことは後日おじと相談していただくということにして、今日はとりあえず蔵書リストだけお預かりして行こうかと思っております」

「それはいけませんね。相当悪いんですか」関根俊一は顔を曇らせた。

「いえ、本人は最後までだだをこねてました。晩酌できないくらいなら、死んだほうがましだと言って聞かないんです」

「ははは。なるほど。いかにもあの人らしいな。しかしわたしのほうもね。べつに手持ちの本を全部処分する気はないんです。わたしだって本には愛着がある。できれば一冊も売りたいくないというのが、本音であることに変わりありません。ですからケンペルの『日本誌』にどれくらいの値をつけていただけるか、まずようすを見てみたいんです。こちらの希望するような値段をつけていただけるようでしたら、ほかの本は売らなくてすむかもしれない。とにかく実物をお目にかけますよ」

彼は奥の階段から二階へ上がって行った。そしてすぐに二冊の本を持って下りてきた。風呂敷に包んである。

「これです。お預けますから持って帰って下さい」

「わたくしがお預かりしていいんですか？」直子は当惑しながら言った。